言葉は依然通じないのだ。

矢張一人旅行した僕にも成る可くは日本人に會つて話して見たくて仕方がないのだ。

そこで暫くの間は矢張り嘗つてベルギーでやつた樣に、日本人を探す氣になつてゐた。

而し何時の間にか僕は丁度東京の不忍の池の樣な具合の所に出て來た。

すると先方から此方へやつて來るのは黑髮の黃色仲間である。

之れこそはと思つて進んで行くと先方もそれと知つたらしく此方へ目を附けて來る。

次第に近寄つて見たら、婦人を連れた、風采の善い、三十歲前後の紳士であつたのである。

僕はまづ世間に慣れた口調で以て、日本式の敬禮をやつて、

「サテ貴君樣は日本では御座いませんか」とやつた、

先方はさも嬉しさうに、

件の紳士が矢張日本式禮をして、

「仰せの通り僕は日本人です。」

と答へた、

僕は言葉を續けて「私は東京の△△區△△町の〇〇の子にて凸と申すものですが、海外旅行以來未だ餘り御懇意に見物を友にした日本人がありませんでしたが、御差支へがなかつたら一つ御一緒が願ひ度う御座います。」

と出たら、

先方は少しまゐつたらしく、

「私は大阪の何々商會の者で、近々新婚旅行に來た樣な次第、他にも連れがある樣な譯ですから、甚だ御氣の毒ですが御斷はりします。」

と答へたから、

僕も多少癪に障つた。

そうすると傍の新夫人が、

バックの中から金貨を三四枚取り出して甚だ僅少で恐れ入りますが日本人の誼みですから御納め下さいと出した。

之れには僕は全くの豫想意外の出來事であつた。

僕は性來潔白な男だから飽くまで辭退したが、強ひて進めるから、有難く頂戴し、此の金で一緒に旅行することを斷はられたのである。

此處に於てか凸の手腕たるや一二の日本大臣を凌ぎ、其の巧妙なる臨機應變の處置たるや實に吾乍ら獨り感心せざるを得ないのだ。

僕は捨てられて此の池邊を一周した。

池の中には無數の水鳥が居る。

然し僕には此の池が却つて我が不忍池の比較に非ずと思つた。

といふのは其の池の淵がコンクリートや煉瓦で作つてあるのだ。

此の中に水を蓄へて鳥を放した所で少しも自然的な所がない。

然るに日本の不忍池は四圍が土の淵で汚い水も清い水も一所である。

そして鳥も鳥も種類を問はず此の中に或は此の近くに子を產んでゐるのは全く此處に比べると自然と云つてもよい程である。

これから僕は諸所方々を見て又もや難儀なホテル探しに取りかゝつた。

此の夕方僕は頭痛がして堪らなくなつたから明い中からホテルに這入り込んで仕舞つた。

ホテルに這入つてベットに横になり女中を呼んで藥を買せようとしたが一向言葉が通じない、

仕方がないから頭をたゝいて見せた。

そうすると女中心得たりと云ふ様な顔付きで下へ降りて行つた。

暫くして又上つて來た。

大分大きな盆を以つて來たもんだと思つて見たら其の邊には林檎や罐詰等を切つてのせてある、そしてビール瓶が一本乘つて居る。

然し僕には其のビール瓶には日本文字が書いてないから酒だとは思はなかつた。

定めし頭に藥であらうと斗り思つたから、傍のコップに注いで呑んだら何んの藥立派なビールであつ　。

これには吾輩日本凸君も流石まゐつて仕舞つた。

實際これには腹が立つのが通り過ぎて可笑しくなつて仕舞つた。

幾ら女中だつて馬鹿に變な方へ氣をきかしたもんだと思ひ出す程可笑しかつた。

それからは何んな用事も頼めなくなつた。

翌朝は近所に鉢花大會があつたから見に行つた。

其處には非常に美麗な花が澤山飾つてあつた。

日本　見られる樣な花は頗る僅かであつた。

僕は更に歩みを轉じて此の度は市中見物と始めた。

美麗な裝をした此の土地の婦人は日本婦人とは全く反對に輕々しさうにずん〳〵市中をねり歩いてゐる。

僕は此處から故土日本に此の地の模樣の大略を報告した。

賭博の官營（モナコ）

僕は何んでもよい兎に角世界第一――でなくとも日本第一なり何んなり、第一の付いたものになりたいのだ、その爲かつて、世界第一の小國として名高いモナコを見に行つた。

諸君の地圖にはあるか何うか分らない。

此の凸ちやんも、あはや素通りし樣としたのを、つまづいて、一寸振り返つて見ると、かつて先生から

「此處には世界第一の小國モナコがあります」

と敎へられた、あこは何んにも敎へられなかつた。

其の時僕は世界第一と聞いて、何か面白い事でもありそうなので、聞かうとしたら先生の奴、クル〳〵〳〵と地圖を卷いて

「今日は是れきりです」

と言つて出て行かれて了つたのだ。

先生多分御存知なかつたのだらう。

一緒に御連れして來て敎へて上げ度い氣分がしたつたよ。

そうすると今後敎へられる生徒が面白い事を聞かれるからね。

諸君に敎へた先生も多分御存知ないだらう。

君達のうちには名前さへも知らん人があるだらうから一つ實地見學した僕が先生に代つて敎へてやらう、然し僕は授業料は戴んから安心して讀んでくれ給ひ、モナコは地中海の岸にあつて、佛國の保護國になつて居る、總面積縮く勿れ八哩四方、東京市よりもつと狹いのだ。

それに人口が一萬五千人、諸君我が國では加何に小なりと雖も田舍に行くと是以上廣くて人口の多い村が幾つも〳〵あるよ。

それでも都のモントロカーには立派な君主の宮城があるよ。

その邊になると流石國だけあつて田舍の村役場よりはずつと美しいのがある

僕、御土產に此の國を買つて來ようかと思つたので佛國政府に交渉して見たら、一寸ポケットが許さないので止して了た。

今でも思ひ出すと遺憾で堪らない。

で此の國は何が珍らしいかといふと

「賭博官營」

であるのだ。

此の國の政府の收入は官營賭博で得た入場料が何よりの收入であるこの事だ

是が然も文明の先進國を以つてほこる佛國の一部であるので、凸ちやんも少なからず面白く感じた。

先づその官營賭博場を見づんばあるべからず、こモナコ驛で下車して一臺の

自働車を雇つて賭博場へと急がした。

行つて見ると素敵もなく大きい美しい建物がある。

入場するんだからといつて、案内を乞ふと時間前だからいかんこの事であつた。

「オヤ〳〵〳〵賭博にも時間があるのかな」

と思つたら、プツと吹き出して了つた。

幸い僕の笑つたのが判らなかつたらしい

判らずにくれて幸い、若し判つたら人の政府の事業を見て笑ふこは失敬だ、何んと、ごなり付けられたかも知れない。

兎に角時間前で駄目といふので自働車で國内見物をやり出した。

歩いて見ても大いした事はない、赤毛布の東京見物よりはよほど樂に出來る

然し日本人こもあるものが歐洲まで行つてノロ〳〵歩いて居たんじや國の威

信にかゝはると思つたので自働車を奮發したのだ。

國内はなか〳〵美しく出來て居る。

何處へ行つても公園の樣な感じがする。

美しい草や木が花を持つて居るのはまるで花屋にでも這入つた樣だつた。

そのうちに海岸に出たのでよく見たら五六門の大砲が据えてあつた。

海面に向つたところに尙も十二三門の大砲があつた。

數人の番兵が立つて居る。

僕の聞く處によると此の國には將校が十二三名に七八十人の下士卒が相當の兵備をやつて居るんだそうだ。

日本では是より、ずつと大きい村でも別に特別の軍備はないが

是でも一國をなして居る爲には必要だかなと思ふと、實際滑稽である。

カシノへ歸つて再び縱覽を求むると、なか〳〵面倒である。

先づ本國を尋ねて是を自分で書かしめ何國から何國へ何用の爲め來り今後は何んの用件で何處へ行くかといふ事を皆んな書かせる。

まるで田舍の旅館の樣である。

面倒なのも當り前である、皇室費、軍備費、行政費皆んな此處から出るんだもの

門番受付書記、立會人など皆んな政府の官吏である。

賭博の模樣を書けば却々面白い、けれども諸君には知らして惡いだらうと思ふから書かない事にした。

何せよ此の國は

「賭博を官營でやつて其の收入で一國を治めて居る國」

と思つて居給へ、詳しい事を知りたければ一寸此の國まで行つて見るも面白からう。

政府には立派な賭博技師もゐる。

それが立會人となつて負けたものは素裸體になつても拂はなければならんこの事である。

で此の賭博場の後ろの方に十五六丈も高い崖がある賭博で負けて裸體にされ生きて行けなくなつた連中は此處から飛び下りて死んで了ふこの事である。

政府は此の哀れなものを救ふべく近頃法律を以て本國まで歸る丈の旅費を支給する事に決めてあるそうだ。

紳士も淑女も狂氣の如く、血眼になつてやつて居る傍には大きな美しい食堂があつて年若い美人のボーイが居る。

葡萄酒、シャンパン、ビール何んでもある。

料理は自分の望むものさへ命ずれば立所に持つて來る、モナコに就いては是以上知る必要がないだらう。

わずか是ばつかりの知識を僕等の先生は知らなかつたから、あんまり當にならん。

是で諸君もモナコに就いての知識が增した譯である　尙詳しい事を知り度いと思ふ人は一度來て見るんだね。

「百聞一見に如かず」

だからね。

吾輩の不覺（ポーランド）

僕がポーランドに着いた頃は丁度夕刻であつた。

此所のステーションまで僕は實際不覺を取つたと云ふのは

僕が汽車中で買つた、パンを食ひ殘してポケットへ入れて汽車を降りて改札口の方へトツトツ〳〵とかけ出して行つた時

件のパンがコロ〳〵と落ちた。

之れには僕も弱つた。

拾ふには拾へず困つた。

此の時流石僕特有の頓智に依つて

パンは破れ靴で蹴り飛ばされたり、踏み附けられたりして其の姿を消して仕舞つた。

やつとステーションを出た時

僕は嫌と云ふ程倒れた。

如何したのかと思つて見たらそれもその筈だ。

靴の下には最初踏み附けられたパンが附いてゐるのだそれが辷つて此の狀態を演じたのであつたのだ。

僕は此の時又東京に居つた時善くチヤメルン君が談話會があつた時に登壇して

曰く「或一日僕は上野のステーションに遊びました時は丁度櫻の花盛りで赤毛布をはずした田舍の連中がぞん〳〵汽車を降りて改札口の方へとの詰め寄せました。

此の時其の中の一人の老婆が大きなニギリメシを落し前方に轉つて行く奴を取らうとした時、改札口に己を待つ人のみを眺めて出で來る人々ばかりだから

勿論足の下に氣をつける人がなかつたのです、

今や其の老婆がニギリメシを取らうとした時に、襟を正し〳〵出て來る紳士が踏み附けて大の字なりに倒れた。

「此の一せつなの演藝たるや實に見ものでした」

と言つた時先生を始め一同腹をかゝへて笑つたことがあつたが

僕の演じたのも踏みしめたものこそ變れ善く似たものだと思つて、

獨り可笑しくなつた。

其の日はそれでホテルに宿した。

其の夜僕は實に嫌な夢を見た。

と云ふのは僕の祖母さんが「僕にもう温順しくなつてもよい年なんだから少しは直らなければならないんだよ私が居なくなつたら祖父さんに善く世話してやつてくれ」と涙を流しやつれた顔で床の中から僕に聲をかけた。

僕は翌朝まで祖母さんの姿が僕の目から離れなかつた。

僕はビツショリと汗をかいてゐた。

僕は此の夜の事が非常に氣になるので特に記錄し置いた。

後になつて其の夜祖母さんが亡くなつたのであつたと云ふことが知れた。

其の日一日は僕はチヤメル驛には行かなかつた。

そしてこの日一日は温順しく市中を見物した。

日本のブランコ式の乘物が公園の一偶に在つて子供等が盛んにやつてゐるのを見た時には

ブランコで名を取つた僕には堪らない程やりたかつたがそれでも心に咎める樣な氣持ちで其の日一日は何時になく温順しく見物した。

歸へつて早速昨夜の夢を通信した。

翌日又もや早朝から外出した。

此の日は市中の到る處で非常に珍らしいものを見た。

それは南洋土人の觀光團であつた。

頭には鳥の羽やら鳥の毛異樣な服裝をした連中が市中をねり歩くから何の用もない僕は此の一團の後を附けて一所に見て歩いた。

行こか戻ろか北の國（ロシヤ）

一　女の三助殿ぢや

お尻に五弗を使つたと思ふと、なか〳〵お尻も粗末にならん。

其の後は大變、僕はお尻を大切にする人間になつた、此の事件がある前までは お尻は身體のうちで一番粗末にされて居つたのだけれども

今は一番大切にされて居る。

然しいくら大切だつて、お尻を上にして、頭で腰掛ける事だけは不可能だつた。

矢つ張り位置だけは其の儘に決める事にした。

ジエチバから維世納を通つて、キエフに出て、それからモスコーに行くの

である。

キエフに來た時は、西も東も見渡す限り大平野である。

寒さもよほど瑞西よりは烈しい

流石大國の露西亞も今は半亡國の體であつて、チツトも市内には規律も何もない。

自分の欲しいものは勝手に持つて行く見付けられると嘩嘩をする。

喧嘩に勝てば持つて行くが負ければ散々打たれて這々の體で逃げて行く。

強い奴は人の家までも横領する、弱い奴は、食ひかけたものでも取り返されて了ふ。

實に奇態な國もあつたもんだ、是じやまつたくの無政府も同樣だ。

この國は今迄で見て來た國とは大變に人情風俗などが違つて居つた。

寒い爲でもあるが人間は體にノロ〳〵して居る、東北の人間に多少似て居

る所がある。

諸君は此のモスコーに就いてはすでに〳〵御存知の筈ですね。

かの歐洲全土を馬蹄にかけし那勃烈第一世も、かつて見た事もないほどの風雪に散々苦しめられ、這々の體で逃げ歸つた處である。

其の夜名物の雪は降つた〳〵三尺以上も積つて了つたので

小さい僕はうつかり外に出ると、存在を認められない樣になつて了ふ、全市街は馬に曳かせる橇の往來が織る樣であつた。

僕も橇は始めてだつたので乘つて見たらなか〳〵乘り心地のよいものだつた

日本の人力車などよりははるかに乘心地がよい、馬は可哀そうに馭者に一鞭

ビユーと當てられるとトツトとかけ出す。

堅く凍つた雪の上を走るのだから素敵に早い。

モスコーで橇の初乘りをやつてから、

あの大平野を横つて、ペトログラードにこ出て來た、汽車の中も寒い〳〵
ペトログラードは諸君もすでに御存知でしようが戰爭前までは、セントピー
タースブルクこ云つて居つたのを、ブルクが獨逸語であるこいふので其れを嫌
つて換へたのだそうです、流石は二百餘萬の人口をもつてる大都會の事こて
宮殿もあれば、寺院もあり、官衙もありなか〳〵立派なものではあるが
とても倫敦や巴里こは比べものにもなんにもならない。
まるで火が消えた樣……明るい處から暗闇へ這入つた樣な氣分がする。
空は灰色に雲つて何んこなく物淋しい。
この都は二百年前かの有名な彼得大帝が都こ定めたのである。
此處を都を定めたる、ピーター大帝は、まさか今頃こんな淋しい都にならう
こは思ひ給はなかつたであらうこ思ふます〳〵悲しくなつて來るのであつた。
僕は……今は亡き皇帝こ同じ名のニコラス橋に立つて日の暮るゝのも知らず

に過ぎし昔や現在や、行末なごを自分事の樣にして考へて居つた。
ニコライ堂の淋しい鐘の音（この鐘の音は東京の駿河臺でも聞く事が出來た
つたあすこにも大きなニコライ會堂があつて朝夕鐘を鳴らして居つた）けれ共
〳〵露西亞で聞く此の鐘の音は亦格別の淋しみを持つて居るのだつた。
過激派は未だ〳〵時々に亂暴をやらかす。
「ウラーウラー」
こ大勢押し寄せて來て は勝手なものを皆んな持つて行つて了ふ。
その中には勿論、老人もあり、女もあり、子供もある。
兎に角食ふに困る連中が團體を作つて奪つて歩くのだから貧乏が絶えないう
ちはやつてるだらうこ思はれる。
諸君風呂は萬國皆同じ物と思ふこ間違ですよ。露國の風呂なごは可なり愛嬌
があつて面白い。驚き給ふな一夕の入浴料が我が國の約五圓から十五圓まであ

る。

僕も五圓を奮發して一夕這入つて見た。

第一に驚いたのは三助だ、まさか三助とは云ふまいが此處の三助は女だつた

「ハヽヽこの女の流し賃が高いんだな」

と思はせられた。

湯屋だつて日本の樣な小さい家ではない、三階か四階の堂々たる大建物だから驚く、一體何んの必要があつて、こんな大きな家を立てゝ置くのかなと思ふ

それもその筈、一客ごとに三室乃至四室づゝあるんだものね、休憩室……脱衣室——普通の浴室……及び蒸し風呂室と分れて居た、そして客一人に女の三助が一人附く。

先づ這入ると浴室の等級を聞かれる、それを決めてから

「女の三助を招きませうか」

と聞かれた、僕は變に思ひ乍らも。

「呼べ」

と命じたら石鹸、手巾それから鳥の巣を丸めた樣な木の削り屑など色々なものを持つてやつて來た。

衣服を脱いで浴室へ這入て次には蒸し風呂に行くと室の一隅には鐵の大圓筒が立つて中で火を焚いて熾んに熱して居る。

傍のバケツには冷水が澤山に汲まれてある、其の傍には高さ六尺計りの床があつて、之には人が自由に寢轉ぶ事が出來る樣になつて居る。

その水を取つて、熱して置いた鐵の筒に注ぎかけるとチユーと音を立てゝ白い湯氣が朦々と立ち登り室に湯氣が一杯になる。

僕は傍の床の上で臥し乍ら湯氣に浴するのである。

湯氣に蒸されて好い氣分に寢ころんで滿身汗ビツショリになつてから次の室

に行くと、石鹸を湯で溶して全身に注ぎかける。
鳥の巣の樣な、木の削り屑で全身を擦つて貰ふから汚垢がすつかり取れて一ト皮剝いた樣に美しくなる。
流し終つてから湯槽に這入る。
傍には栓さへ捻れば湯でも水でも自由に出て來る。
頭の上から冷水を注ぎかける注水所もある。
湯から出て衣服を着て休憩室に這入つて呼鈴を押すと、オーツカ酒でも、麥酒でも、葡萄酒でも、シヤンパンでも好きなものを持つて來る。
こう聞いて見ればなるほど高くも無いと思ふだらうね、
先づ是で僕も露西亞風呂に這入つたから、風呂の話が出た時は大きな事も云へる譯だ、嬉しいなあと一聲やつた譯さ。

二　雪隱の番人閣下

僕がペトログラードのホテルで友達になつた一人の露人とある日散歩した。
名前はラールスキーと云ふのであつた。
ラールスキー君、何うかして突然往來の眞ん中で腹痛をやり出して辻雪隱に這入らうとすると番人の老媼さん手で制して
「滿員〳〵」
といふ彼は餘儀なく大きな珈琲店に飛び込んだので僕も後から這入つて行つた
殆んど一時間にもなるのにまだ彼は出て來ない。
「ラールスキー何うしたのかな、まさか逐電した譯でもあるまいが、失敬な奴だ」
とブツ〳〵言つて待つといへども出て來ない、ボーイは癪にさわつて來て

「何をお上りになりますか」

と聞く

しばらくしてから彼は悠然と現はれた、何んとか、かんとか御詫びの千萬べんも云ふかと思つて居たら至つて平氣なものだつた。

「オイ君、人を一時間も二時間も雪隱の番人をさせて置いて一言も云はんとはあんまり失敬じやないか」

と頭から叱り飛ばしてやつた、所が彼は平氣なもので

「君病氣だもの仕方が無いじやないか、一體糞我慢をするほど苦しい事はないよ」

「君もまあやつて見給へ」

との一言である、何んたる無禮な言だらう。

あまりの事に僕はおかしくなつて笑ひ出して了つた。

「まあ君、そんなに怒り給な悪い氣でやつたんじやないんだから」

「オイ僕(ガルソンヅー)麥(ボック)二杯持つて來い」

僕は此の一言三言と麥(ボック)一杯とで二時間ばかりラールスキーの雪隱の番人をさせられた譯である、思へば〳〵。

シベリヤ二千里一はしり

一　此奴目つきが惡いぞ

朝晴れのペトログラードを出發した僕は沿道左右に廣莫たる大平原を下瞰しつゝテエリヤビンスクに着す。

此處には多少高臺に入れる所でステーションの所在地の左右斷崖絶壁の好形を添へて居る。

僕はもう旅行こゝに一有餘年最早故鄕が戀しうて戀しうてならぬがまだ〳〵豫定までは日がある。

心靜かに瀘車のあるきに從つて赤い夕日に照されてオムスクに着いた頃は既に夕餐の賣買の聲が盛んであつた。

僕も此處で黑パンの一斤と牛乳一本を買つて車中の人となつた。

間もなく瀘車は無雜作に此處も後にして火花を吐き〳〵進む僕は皆と同じく夕餐を仕ました。

中には支那人も居つた彼等は油多い肉を竹の皮から出して二人が喰つてゐる

夜は暗黑で只軌道にすれる齒車の音と吐き出す火煙のすさまじい物音ばかりである。窓を開いて見ると冷い風が吹き込んで思はず襟を正させた。

外は端て知れぬ廣野である、空は無數の星が輝いて人里遠き此のシベリヤの荒野に輝いてゐる。

もう夜の九時頃だらう、其處此處の人は首を垂れ始めた。

僕は餘りの無聊に近所の人々の寢顏を一々眺めて見たが大きな身體に大きなイビキ赤い頭髮に青い目の露人や其の他白人の寢顏は實に物凄い。其の無格好な寢樣と云つたら話にならぬ。

最前の支那人も二人とも寢姦めた黄色人種の寢振は實に善い、どことなくやさしい俤がある。

一人歳の頃四十以上にも見える露西亞人らしき男が他人の寢入るまゝに一層其の凄い日色と注意とが增す樣に意識された。

僕も次第に眠くなつて來たが如何しても彼のそうして獰猛な嫌やな姿は閉ずる、僕の目には見るよりも一層はつきりと頭に映ずるのであつた。

知らず知らずに自分は眠つて仕舞つた。耳の際で話聲が聞え餘り騒々しくなつたものだから靜かに目を開いたらもう夜が開けて居るのだ。其の中に貴族の婦人らしい人がバックを調べて金の紛失を叫び出した。

四圍の人々は忽ち其處に集つた僕は未だ半睡半覺の狀態であつた。

此の騒ぎが起るや誰一人床に居る者がない。僕はすぐ昨夜の偽を思ひ浮べたそして其の人の存在せし場所へ目を注いだが、彼の人は最早其所の人ではなかつた。

勿論此の室内の人ではなかつた。

彼の女は泣かんばかりに悲觀してゐる。

聞く所は彼は或貴族の夫人にて戰亂を侵して此度支那へ遁れしハズバンドを探して行くのださうだ、此の騒ぎはタイガのステイションに持ち込まれた。

早速コンダクターに事の事情が告げられた。

そこで乘客全部がタイガに降されて、個人檢査となつた、この處で嚴重な檢査を受けたが元よりそんな人は居やう筈はないのだと云ふことは後になつて解いたのであるが。其處では氣の毒にも二三の人が檢疑者として拘引された。

無關係な僕は此處で瀛車を離れこの邊を少し見物しようとプラットホームをストリートへ出た、この邊から多數の鮮人や支那人が居往して居る。

僕はとある料理店へ這入つたが物資拂底のこの地にはさうした食欲を擽くわ

けにも行かぬのである。

僕はこの町を縱横に歩いて郊外へと出た、露西亞人の農牧に從事してゐるものが其處此處に見える。

この茫々たるシベリヤの農原地は、全く露國の倉庫であらう。

所々にトハレムブルナ露西亞人の家や鮮人支那人の家が散在してゐる。

タイガからイルクツクまではもう右を見ても左を見ても白皚々の雪の平野だもう何處を見ても白いものばつかり、黑いものは橇引く馬だけである。

僕は日數なんかしつかとも覺えてをらんがペトログラードを發してから何んでも十日ばかりも雪の中を走つた樣に思はれる。

僕は眠る時眠つて勝手な時起るのだからいつがいつやら判らないのだ。

それでも今朝イルクツクで乘り替えたのは覺えてる。

その瀛車が丁度今バイカル湖の南岸を走つて居るのだつた。

湖の岸には奇巖が高く聳えて其の上に立つ松は雪に壓されて枝が何丈といふほど垂れてゐる。

湖面は全く氷結して居らしい。上には雪が積り、橇が湖上をゆる〳〵と歩いて居るなど實にいゝ眺でめあつた。

カクタロボまで來てから一寸パンを買ふ爲に下車した、こても此の邊では瀛車まで運んで來て賣つてくれる人などない。

持つて歩くうちに取り返されて了ふからだ、ペトログラードさへ半ば無政府の狀態なんだものこの邊の物騷なのは普通の事と思はなければならん。

やつとこの事で二圓ばかり出して麥酒一本と、黑パンの鹽の付いたのとを買つた。砂糖なんて氣の利いたものなどありつこはないのだ。

二　ビールが凍つた？

是丈の物でも買はれたのは眞實天の助であるこゃび乍ら水の代りにビールを呑み乍ら黑パンを食べ樣としたら、ビールは堅く凍つて居る。

しかたがないので壜を破つて、ガリ〳〵とやつた。

もうビールの氣も何も無い、黑パンは堅くて、臭くて食へ付けない僕にはこても食はれたものじやなかつたけれ共、腹が空いては歩けないから、それでも何うやら。こうやら呑んでやつた、お腹の中は變にブグ〳〵する。

此處では繪葉書を澤山買はうと思つたが高くて買えやしない、やつと二十枚ばかり買つて國の方へこ送つた、氣候は急に暖くなつたり急に寒くをつたりする、こんなところに長居をするこ命が危ないこ思つたから、そのまゝ滊車の中

に這入りマンチユリスターからハルピンを通つて、浦鹽斯德に出た、此處は尙更物騷千萬だ。

過激派が盛んに横行して居る、米國の軍人も居れば、佛國の軍人も居り小さい身體した日本の軍人も居る。

奪取、强盜、人殺し、もう毎日の樣にあるのでうつかり外へも出られない。

僕はもう母國が見えるほご近くなつたので一度國に歸つて見たかつた。

けれ共歸る自由を持たなかつたのです。第一僕のお父さんが許してくれない豫定の地を全部通つて來なければ國には一歩も足を入れさせないこの事ですから この儘歸る事は出來ないのでした。

で懐しい日本海も通り左に北海道右に青森縣を見て涙乍らに通つたのです。

太平洋の上で歸り度い〳〵こ思ふ、東京の空を見乍ら米國のサンフランシスコへこ向つたのでした。

静かな海では盛んに鯨が潮を吹いて居るのが見えます。

ひよつとすると船の近所で潮を吹いて甲板の上まで潮を吹き上げる様な事もあるので度々驚かされました。

恐ろしい馬賊（ハバロフスク）

黒龍江を九百九十四露里ばかり上つて行くと此の川と烏蘇利川との合するところに、ハバロフスク府がある。

僕は此の府に行つた時、前にも御紹介して置いた蒸風呂の饗應を受けたのです。

蒸風呂の事はすでに諸君も御存知の事ですから、此處ではそれを省きましやう。

その代り此處の家の主人が昨年の夏、小説よりも奇なる悲劇の中に横死した話をしませう。

昨年の七月頃だつたさうです。

此の蒸風呂の主人公が、自分の日頃最も愛して居る一子、イリハミこいふ丁

度十歳になる子供を連れて近所へ散歩に出かけたさうです。

常に人の大勢出る場所へ行つたら、其の日まで店に使つて居つた、一人の番頭が突然出て來て。

「イリハミさん、私と遊びに行きませう。」

さいつたので、

「アラお父ちやん遊ばう。」

さすぐ駈け出して行つたさうです。そして何時まで經つても親の處へ歸つて來ないので、もう家に歸つて居る事と思つたのでせう。

さして氣にも止めず、ブラリ〳〵と家に歸つて來たさうです。

家に歸つて見たら、イリハミさんは歸つて來ないこの事なので、

「じや未だ遊んで居るもの。」

こ思つて歸るのを待つて居つても姿が見えない。その中に夜はだんぐこ更けて行く。さあお父さんも心配になつて來た。

「何うしたものだらう。」

こ俄かにあわて騒ぎ出したが、夜が明けても歸つて來ないので、多勢の人を頼んで四方八方に探しに出したさうです。

一日二日こ探すこいへども、いつかな探し出せさうにもない。

最愛の只つた一人の娘を見失つた父は非常に心配して狂人の樣になつたさうです。

で其翌日は、あらゆる新聞紙に廣告を出したさうです。

「イリハミを探し出して連れて來てくれた人には五千留の懸賞金を呈す。」

こ毎日〳〵一號活字で廣告を出したのでした。

新聞廣告は出す、雇人は四方八方に走らして探したが見當らなかつたが、或る日の夕方、一人の大男が主人公を尋ねて來たさうであつた。

「何んな御用件ですか。」

と聞いたが、

「主人に逢つて話したい。」

この事に、多分探して居る子供の事ならんと思ひ、早速主人の室に通したさう

である。ヅカ〳〵と主人の室に通つた男は、

「私はあなたの今探して居る子供の居る場所を知つて居ます。」

「何處に子供が居るじやすぐ私が行くから案内を賴まう。」

といつて主人はもう立上つたさうです。ところがその男ゲラ〳〵と笑つて、

「そんなにお急ぎになつても駄目です。」

「あの子供は活かさうと殺さうと私勝手ですからね。」

「若しあの子が欲しかつたら五千留なんてけちな事いはず、現金で一萬留御出

しなさい。」

と言ひ出したさうである。

「さては此の男、强迫して金を奪ひに來たのか。」

と思ふたが、

金よりも子供が欲しい親心、はて何うしたものかと思案して居つたさうだが

「今手には持つて居ない、下に行つて金庫から出してくるから待ち給ひ。」

と言ひ渡して大急ぎで下に行つて。

「チリチリン！」

と電話のベルを鳴らして警察に電話をかけたさうです。

所が强迫に來るほどのものですから油斷はない。入口まで來て見て居つて、

警察に知らして居るのが判ると、二階から待つ合はして居つたピストルを無暗

と亂射したので、哀れや主人は電話を半分にして、無慘の死を遂げたさうです

「それつ人殺し。」

こ家人が驚き騒ぎ出した時は、もう賊は居ない。
飛鳥の如く表に駈け出して雲を霞と逃げた後です。
一體此の邊は馬賊が出て來て殺したり財寶を奪つたりするのは平常の事なさうです。
白晝であらうこ深夜であらうこ、人が大勢居やうこちつとも御構なしださうです。
何時でも賊か早いのか、警察が遲いのか現場でなんか捕へた事なし。
賊の姿を見る事が出來んこいふのだから餘つぽど變つて居ます。
寒いから警察でも通知を受てからストーブを暖めてゆつくりこ暖を取つてから出かけてくるのでせう。
黒髪の娘は手代の爲に行衛知れずになり、主人は賊のピストルに殪れ、さしも壯大であつた此の蒸し風呂屋も哀れな狀態ならうこしたさうです。

或日一通の電報が黒龍江の下の方五十露里ばかりの處から屆いたので、早速開封して見るこ、
「御尋ねのイリハミさん發見したすぐ來い」
こあつたので家人は亦も以前の賊の計らひじやないかしらこ思つて警察の方へ頼んで家人も二三人付いて行つたさうです。
處が今度は賊にはあらで、親切な村の木こりが世話して居つてくれたさうです、飛び立つほど喜んで、何うして此處に來て居るのかこ尋ねて見たら
「初め番頭に連れられ其の邊をブラ〳〵散歩して居つたら歸り度くなつたので家に歸らうこ言つたらすぐ連れて行くこいつて途方もない方へ連れて行かれたんださうです」
そして今度は船に乘せられたので、何處へ行くのかこ聞いたら面白い處へ連れてつてやるこいつて、川の中の小さい島に運れてつて離されたので大聲出し

て助けを求めたけれども、自分一人置き去りにして番頭は跳つて了つたので一晩寢ずに泣き明かしたとの事です。

それから二三日經つて亦小船が來たから今度は助け船だらうと思つたら、見知らぬ男が上つて來て

「お前のお父さんは、お前より金が惜しいといふから殺して來た」

「お前もお父さんと一緒に死ぬがいゝ」

といつて手拭をグル〳〵首に卷き付けて殺さうとしたから

「助けて下さーい」

と聲のあらん限りを出して叫ぶと

「やかましい叫んだつて助けに來る人がないぞ」

とどなり付けられ、其の後の事は知らないと、イリハミさんが申しました。

その大聲を出して助けを求めて居つた時通り合はしたのが此の爺さんで、早

速船を寄せて陸に上つて見ると小島の陰の方から船が出て行つたから

「はゝ怪しい」

と思ひ乍ら小さい島をあちこちと探すと、一人の娘が手拭で首を卷き付けられて倒れて居つたから

手早く手拭を取つて手當をしたら、やつと息を吹き返して、これ〳〵であつたといふので、

「お前の名前は」

と聞くと

「イリハミです」

と答えたのでさては新聞で懸賞つけて探して居るのが、此の子である事が判り早速電報を打つたのだといつてました。

是を緒にして、警察は大活動を始め遂に一人殘らず賊を捕まへ、ここごく

死刑に處したさうです。

此の蒸風呂屋は今此のイリハミさんが女主人公で此の話を聞かうとしてか、イリハミさんを見樣としてか方々から大勢の客が來るので以前に增さる大繁昌です。

僕は蒸風呂を御馳走になつてから直接イリハミさんから聞いたのですから、諸君に紹介して置きます。

北米めぐり

大陸だツ、大陸だツ

「陸が見える。」

「あッ！大陸だッ！」

「こ、これ、何處に？」

「なある程なあ。」

「アメリカだ。北米大陸だ。」

「愈々來たなッ。」

「イヤ。愉快々々。」

「到頭、アメリカへ來ちやつたわ。」

「まあ。うれしいことねえ。」

始めて大陸を發見したやうなよろこび。これから見てもコロンブスが、北米大陸を發見した時の歡喜が思ひやられる。

日本郵船會社汽船美濃丸の甲板上に、滿船の客が、悉く現はれて、手に手に雙眼鏡を握り乍ら、左舷遙かにバンクーバー島の翠黛を水煙模糊の間に臨み、以上のやうな興奮した言葉を一人々々が、連發した。

おどり上つて喜んだのは前日の午後三時頃だつた。これはその筈だ。長旅に飽いた人達の足が、やうやく大陸の土を踏める時が來たんだもの。

やがて、一時間ばかりの後、左右に帆影が見ゆるもの、始め一隻、つゞいて又一隻、後には汽船も見えた。

陸地は更に舷の右方にも見え始めた。

明日は英領カナダのヴ井クトリア港に暫時上陸が出來るといふので、この夜

船客一同は、三鞭の盃を幾杯も傾けた。そして航海の無事であつたことを、船長殿に感謝したもんだ。

食後醉顏を海風に拂はせ乍ら、甲板を散歩すれば、下弦の月は中天に清くだぞく〳〵するね。思ひ出しても。

影を海波の上に落して、銀砂を撒いたかと疑はれるばかりの光景だ。僕も文章が旨いだらう。まんざら棄てたもんぢやあるまいて。

月下に指點する右方の大陸は、北米ワシントン州だ。左方はカナダのコレビヤ州だ。

廻轉燈臺は、遠く近く、燈光を斷續し乍ら、僕等の船を導いてゐる。

偉大なるかな大陸の影。

凸ちやんを始めとして、滿船の乘客樣、意氣いよ〳〵あがらざるを得んやださうだらう？　違ふかね。

その翌日僕等はヴ井クトリア港に着いて、上陸した。僕はユニオンホテルに泊ることになつた。

此處で、一つ茶目式を發揮したことを序に書いて置く。僕だつてまだ少年だいたづらもしやうぢやないか。

その前に、上陸の光景を一寸書くことにする。いたづら小僧の日記は、しばらくあと廻しとした。

待ち玉へな。

船が大陸の影にかくれた翌る日の朝だ。平生より一時間も早かつたらうと思ふ。つまり六時半に打ち鳴らす銅羅の聲が五時半頃に

「グワラン。ドラン。ドラグワラン」

と鳴り轟いて。

この恐ろしい音に、ハンモックの上から轉げ落ちた僕はすぐ洗面して。食堂

へ駈け込むや否や、人のか自分のか、その邊の區別なく、朝飯をパクツイて了つた。

船は、いよ〳〵ヴ井クトリア港碇泊でございとボーイが、觸れ廻つて來たそのボーイの聲！　その聲まで、活々して、何とも云へぬ、いゝ感じがした。

ボーイだつて、長航海に退屈だから、ヴ井クトリヤ港へ上陸した、散々、飛び廻つて遊び廻り歩るかうと云ふのだらう。

だから、「碇泊でござあ――い」とガラン〳〵と銅羅を打ち鳴らし乍ら、やつて來たときの顔！　ニコ〳〵してゐたよ。

船は止つた。

凸ちやんは甲板へ駈け登つた。見ると檢疫官が、大きな面をして來て居る。

「これから、お客樣の檢疫をいたしまあうす」

とボーイが、向ふで喚いてゐる。

「ハヽア。先生。病人だけは上陸を許さぬと見えるな」

と思ひ乍ら、僕の番の來るのを待つてゐると、やつて來た。

「君の名は何と云ひます」

これが、英語だ。

「ワット、イズ、ユア、チームてんだ。ようし、マイ、チーム、イズ、デコチヤンてんだ」

「はゝあ。デコチヤン？　これは面白い」

僕の名を聞いて、妙な顔をして、面白いと吐しやがつた、怪しからぬ役人め何がおかしいんだ。僕は昔から凸ちやんだ。

やうやく檢査が濟んで了つた。

美濃丸の日本人勞働者は、續々上陸してゐる。それは特別に棧橋からでなくて二町ばかり、海の中を泳いで渡るんだ。

「勞働者だからと思つて馬鹿にしやがる」

とつぶやきながら、勞働連は、ジャブ〳〵泳いで上陸してゐる。オカシイもんさ。

何も泳がせなくつてもよからう。泳ぎを知らない連中はブク〳〵やつて居る

「オーイ、助けてくれ――」

なんて、悲鳴を擧げてゐる方へ、一隻の端舟が、スル〳〵辷つて行つて助け上げて上陸させてゐる。

「妙な習慣もあるもんだ。勞働者は、泳ぎを知らないと困るんだな」

と考へた。

日本の勞働者で、米國へ行く人々に申す！　貴君等は、泳げなくつちや、上陸が出來ないぞ。

トラホームなどの檢査までやらせられてゐる連中もあつたやうだ。

其處には日本の移民官も來てゐた。僕は船が棧橋へ横づけにされると同時に大鞄一つを後生大事に抱へ込んで、

「美濃丸よ！　さらば」

の告別辭を呈した。そして、到々上陸して了つたのだ。僕は此處からシャトルへ出た。

シャトルから桑港行の北太平洋鐵道瀛車へ乘つた。それは午後五時だ。

此驛には、僕のやうな日本人が赤帽を冠つて旅客の手荷物を運んでゐた。

僕は何だか、なつかしくつて仕方がなかつたから。

「君も日本人だね」

と云つてニコ〳〵して頭を見てゐるもんだから、向うでも、なつかしく思つたのか、

「サア君こちらへ來たまへ、僕が荷物は持つて上げませう」

と云つて車室の世話などし　呉れて、甚だ便利だつた。

此瀛車はシャトルから桑港まで、約一千哩を四十時間計りで走るのだから、すてきだ、其構造は、客車十五六輛連ねて、一室ごとに黒奴の給仕が一人づゝ、ついて、一つの車中に兩方六室づゝの寢臺があつた。それが上下二段になつて眞中に路があつて寢臺の所は幕が張つてある。

僕の氣になる便所もあれば洗面所のとなりには喫煙室まであるのだから驚かざるを得ないよ。

洗面所には、一度使へば棄てゝ了ふハンカチが何枚も積み重ねてある。

「何てもつたいない、僕のハンカチよりきれいなのに、これをみなすてるのかなア」

と思はず、口ばしつて、あわてゝ手を口にしながら、四邊を見廻したが幸ひに誰にも聞えなかつたと見えて、ふり向く人もなかつたので、凸ちやん

「しみつたれなことを云つたが聞く人がなかつたから、まあよかつた」

姿見の前には櫛、石鹸など具はつて、便所には太く巻いた紙など遺憾なく具へてあつた。

凸ちやんも便所はあるし、時々平公する紙もちやんとあるから安心した。

客室には一車ごとに名がはつてあつて、車内の席には順々に番號がしるしてあるから、今度は自分の席にまよふやうな心配はない。

となりの女にボーイが、何だか大きな紙ぶくろのやうなものを渡した、自分にも呉れるかと待つてゐるが、呉れないからをかしい、

「僕のやうな日本人には呉れんのかなァ」

と思つたが、

「なりが小さいから解らないのだ……オイ、ボーイ君僕にもそれを呉れ給へ」

と手を出すと、ボーイの奴、變な顔して默つて行きすぎた。

此處も少し變だと思つて、よく見ると婦人ばかしに渡してゐるのである。

何が這入つてゐるかと思へば、何もない。

「何——んだい何も這入つてゐやしないのか、馬鹿々々しい」

と今更、ボーイに呉れと云つたのが、面目ない。渡されて婦人はめい〳〵帽子を入れて上につるすのであつた。

なるほど美しく飾つた帽子はあゝせんと、破れるをそれがあると感んしちやつた。

けれども困つたことがある。

それは、脊の高い西洋人本位に依つてあるので何でも上の方にあつて、自分のやうに小さい者にはことに平公、棚は高し、椅子は高くて足がとゞかず、小便つぼが又ばかに高くて一件が頸くゝりそうには困つた。

僕の旅館のユニオンホテルと向ひ合はせた——と云つても女關の前は、四通

發達の大往還で、人馬駱驛の有樣だ――丁度ホテルの裏口と向ひ合はせた處に一軒の洗濯屋があつた。

この洗濯屋の米の種は、このユニオンホテルなんだと云つたばかりでは解るまいが、このホテルのお客さんの洗濯物をして一家族何人だか知らぬが、パンをかじつてゐるんだ。

其處に小さい子がゐる、名は何と云ふのか知らないが、口の悪いアメリカン子で、僕が窓から眞つ黑に燒けた顏を出すと、

「ヤーイ！　黑ん坊やあい」

と囃し立てゝは、近所の子を狩り集めて來て、窓から石を投げ込むから、いかに温厚篤實の好紳士凸ちやんも、終いには怒らざるを得んやとあつて、一日僕がこの子を捉へてジャパン拳骨を一つポカンと進上してやつたら、奴め泣き出して家へかけ込んだと思ふと、お袋を引つ張り出して來たんだ。

「又、あの日本の子が、お前を扶つたのかい」

プリ〳〵怒り乍ら、お袋が、僕の處へ談判に來たから、僕は早速こんな處で喧嘩をしちや、大勢のお客さんに笑はれると思つて、お袋が部屋へ這入るや否や眞つ裸になつて蛸をごりをやつて見せたら、

「あれッ！　この人は狂人だ。仕樣がない」

と云ひ乍ら引揚げて了つた。

お蔭で攻擊を擊退することが出來てから、僕はこれから、ちと面倒なことが起ると、いつも裸になつて蛸ダンスをやるんだ。

國の大姉さんが聞いたら、顏を赤くして嘸怒ることだらう、内證にしてくれ玉へ。

いたづらと云ふのは即ちこれさ。

二　復活祭は年中行事

今日は耶蘇復活祭の日だ。

キリスト復活祭は毎年三月廿一日以後の滿月の次の日曜日に行ふのが例になつてゐる。

今年は三月の廿七日の日曜日に當つてゐるから、盛大は愈々盛大こ來た。

イギリスやアメリカに於ける年中行事の重なもので、そのうちの一つだ。だから、その由來を知つて置く必要があるだらう。

凸ちやんに少し饒舌らせてくれ。

無益なことではない。中學生や小學生の君等が、英語を勉強する助けになるぞ。とかう脅かして置いてさて、

キリストは三十歳で起ち、救世の事業に着手された。それから三年の短かい

月日、南船北馬、到る處で教を宣べて、所謂『迷へる子羊』どもを導かれ、病める者を癒され、自ら神の儀表となつて人間の靈魂を救はうと努力されたことを君等は御存じの筈だ。

處で、この正義の人キリストが何故か十字架にかけられたか、死刑にされたか、盜人と一緒に殺されたかといふことも諸君は既に知つてゐるだらうから云ふまい。

キリストが死刑されたこき、弟子は四方に離散したが、キリスト甦へりこ云ふ信仰に再び、その元氣を恢復して、神の國の建設に力を盡し、彼れ死するも彼れの神の國は、いよ〳〵其大を致せしもの一に此美しき死にあらずんばあらずこいふやうなことで、弟子や人々は、再び人道こ正義を守つて來たのださうだ。

このキリストが、十字架の上で死んだのは金曜日だつた。あこ三日で月曜日

になる。その朝だ、

マグダラのマリアといつて、篤くキリストを信じた婦人が、墓參に來て見ると、入口の石――ユダヤの墓は日本の鎌倉にある大江廣元の墓のやうに、岩窟の中にあつて、入口を大きな石で塞いであるのだ――その入口の大きな石が、いつの間にか、取りのけてあるので、マリアさんびつくり仰天。早速駈け出して行つて、キリストの弟子にこの報をすると、ペテロと今一人が走つて來た。見ると、キリストの死骸を包んだ布帛はチャンと置いてあるが、御本尊のキリストの姿は一向見えないのだ。

すると、弟子連中は、これは屹度誰かゞ、キリストの死骸をよそへ移して了つたこと、思つて家へ歸つたけれども、マリアは墓の前で、泣き悲しんだのである。

すると、やがて、その後ろで、

「女よ。何故泣くか。汝は誰を尋ぬるか」

と云ふ聲がするので、ハッと思つて、振り返つて見ると、豈圖らんや、これがキリストだつたのだ。

キリストは月曜日に甦へつたのだ。

その後、キリストは弟子達の間に現はれるやうになつて、で、テベリアの湖畔に姿を現はし、三度迄弟子達と親しく言葉を交はして、遂にベタニヤに到つたとき、弟子たちを祝福して、自分は昇天されたといふことが、バイブルの傳說なんだ。

處で、この復活祭といふのは、教會でやるので、イスター、リーリーの花で美事に殿内を飾ることになつてゐる。

三　コラコラ凸太郎

この日をイスター、サンディと云ふのだ。日曜日でなくつても、サンディだから奇拔だらう。

家庭では、色々な彩色をした鷄卵を飾つて、必ず茹でゝそれを食べなければならぬ規則だ。

この彩色した赤や紫や黃色の卵は旨いもんだよ。

僕は珍らしいもんだから、胸が苦しくなるまで、鰐腹つめ込んだもんだ。

町へ出て見ると、今日は玩具屋には、玉子の玩具が出て居る。

菓子屋へ行つて見ても、やつぱり彩色玉子のアルヘイばかりだから、不思議だ。何の爲に彩色した卵を食べるのかしらん。

道を通る人々は、盛裝して、綺麗な花束を持ち乍ら、ぞろり、ぞろりと墓地の方へ、お參りに行くんだ。

お墓はスツカリ掃除が出來てゐる。

日本のやうな汚ない土まんぢうのやうなものぢやない。大理石ばつかりだから、氣持ちが違ふわい。

僕の家の墓はアメリカにはないけれども、何だつて、わざ〳〵見物に來たんだから、人の墓へ行つて見やうと云ふので、僕も花束を買つたね。

そ奴を、ぶら下げてお出掛けになつたもんだ。そして、『南無阿彌陀佛』なんて、そつと、人々の後ろから、拜んで來た。おかしなもんだよ。人の墓だからね。

墓と云ふ墓は皆、花で飾り立てられてあるんだ。それがまた目覺ましいものなんだ。

ここに、この邊のアメリカ墓と來たら、美しい芝生が出來てゐる。僕は、宿屋から辨當を拵へて貰つて、他人の墓へ行つて、むしや〳〵と遊びながら食つたね。

そして、一しきり晝寢をやつたね。

あまり心地がいゝんぢやないか。それから目を覺してあくびをしながら、

「ウ――ン」

と背伸びをして、ふと傍を見ると、松の枝が、だらりと下つてゐるから僕は…

帶を解いて……

「何？僕が、首をくゝるんだつて?!」

「ふざけるな、小便をしたんだ」

小便を、お墓の前の芝生にシャー〳〵とやつて居る。氣持ちのいゝもんだ。

芝生に露の玉が出來たぜ。小便がジユウ〳〵と土の中へ吸ひ込まれて行く處が、面白いとよろこんで、二日分の小便を一度にやつて了つて、

「ブル〳〵」

と身ぶるいをしてゐると、突然後ろで、

「コラ!!凸太郎!!」

怒鳴つた奴がある。吃驚して振り返へると、それがその、日頃から、虫の好かぬアメリカ巡査だから、

「キャツ」

と云つて逃げ出した。

と辨當を半分殘して置いたのが、惜しくつて、惜しくつて仕方がないけれども何しろ、大きな熊のやうな巡査公が、ごん〳〵追つかけて來て、小使錢に、僕の財布から罰金を引き上げやうと云ふのだから、もう辨當所の騷ぎぢやないのだ。

墓と墓の間をぐる〳〵逃げ廻つた。

何しろ、僕は人間が、小型だ。巡査公は特別仕立の大形と來てゐるから、旨く墓地の中を駈け拔けが出來ずに、了ひには、石塔と石塔に挾まれてウン〳〵

呻つてる乍ら、剛情な奴で、

「コラ待て、凸太郎！」

と叫ぶんだ。

「や、石塔に挾まれたな。ようし。オイ、アメリカおまわり。僕は凸太郎ぢやないんだぞ。凸ちやんなんだぞ」

と惡態を吐いて、どん〳〵逃げてやつた。

い、氣味だと思つたが、考へて見ると、復活祭の日に、お〻僕が、惡かつたと後で、後悔したが、その後一度もあのデブ巡査と出會はない。

出會はない筈さ。間もなく僕は、出發したんだもの。まさか、お墓に小便をしたと云ふ科で、他國まで、瀉車賃を拂つて、僕を追つて來る氣づかひはあるまい。

もうお墓に小便はこり〳〵だ。これは別の話だけど、イースター、サンデー即ち復活祭の日には、社交界では、イースターのお祝ひ物やカードの交換をやつて遊ぶさうだ。

丁度、日本の新年のお年玉のやうに。

これが、僕の復活祭の思ひ出草だ、へイ御退屈さまと云ひませうか。

四、四月馬鹿

四月一日をエプリルフールと云つて互に友達同志無邪氣なことを云つて欺し合ふ習慣があるのだ。

凸ちやん一つ欺してやらうと友達の處へと朝起きるが早いか電話をかけた。

「モシ〳〵少し取り調べる事があるから即刻警察署へ出頭せられよ」

と變な聲音をつかふと、驚くと思ひの外、

「ハヽヽ、おい凸ちやん、四月馬鹿になるのは御めんだよ、凸ちやん獨得の其

發音では誰も欺される者はないよ、ハッハヽヽ」

と一本まいらすつもりで一本まいられた。

この四月馬鹿の日に欺され奴のことを「四月馬鹿」と云ふんだ。

日本人なら、こんな場合に隨分小つぴドイ嘘を吐いて、他人に迷惑をかける者が多いだらう。

例へばだ。

前日に端書を出して

「明四月一日午後一時に參上仕可候、是非御在宅被下度候匆々頓首參拜」

なんて、一拜だけ餘計に拜んで置いて、生眞面目に人を「御在宅」させて置く。

先方では、眞面目に一時頃待つてゐる。ごんな逼迫した用事があつても、仕方がないから待つてゐる。

待てども待てども、手紙の差し出し人は來ない。

「ごうしたんだらう、本紙の讀み違ひかしら」

と思つて、今一度念のために譯んで見ると、「四月一日」と特別に大きく書いてある。

漸く氣がついて。

「おゝ。今日は四月馬鹿の日か。ウン左樣か」

と歸るときは、もう待ちあぐんだ後で、肝腎の急用も何も、ウッチャらかしてアッた後だ。

甚しいのは、電報で

「某の住宅が今燒けました」

なぐゝ打つから、受取つた方では、ハッと思つて。其處へ駈けつけて見ると何のことはないカラ嘘だ。

「おや〳〵四月馬鹿にされちやつた」

と氣がついても、腹を立てない。

それが、遠い〳〵瀛車で行かなければならぬやうな處だと來るとほんたうに泣き度くなるだらう。

暇はつぶすし、金はうつちやるしさ。

處が西洋人は、これに反して、こんな惡どいイタヅラはやらない。

すぐ其場でハゲるやうな嘘を吐いたり、だましたりするのだから後で恨みが殘らぬと云ふものだ。

つまりだまし方が無邪氣なんだ。

可愛い、お孃さん達が、明日は四月馬鹿だと思つて、床の中で、起き出る前に色々と面白い工夫をこらしてゐる。

愈々其四月一日になると、早く起き出て、

「おや母ちやんのお顏に墨がついてゐるよ」

と云ふ位が、關の山だ。

すると、お母さん、迂闊してゐるから、

「おやさうかい」

と云ひ乍ら、態々、化粧部屋迄行つて鏡を見ると

「オヤ〳〵何にもついてやしないぢやないか」

さまだ、何にも知らずに來ると、お孃さん達はクス〳〵笑ひ乍ら、

「母ちやん、今日は四月馬鹿よ」

「オーヤ、オーヤ。」

で、笑ひ崩れる位なもんだ。

何と、凸ちやんは、西洋人の肩を持つだらう。それもそうさ。西洋に居る間は西洋人の肩を持つて、奉つて置かないと、排日運動を食つて小つぴどい目に逢ふからね、アハヽ。

五　越中ふんどし無用でござる

北米合衆國の大都市、ニューヨークを諸君は知つてゐるだらう。小學生や中學生諸君や凸ちやんが大好きの活動寫眞で御存じの紐育。

丁度この紐育市に着いたのは夏七月だ。白い服を着た男や女が右往左往してゐる。

海岸へ納涼に行く汽車や電車、海水浴場へ急ぐ乘合自働車が炎い日盛りをどん〳〵走つてゐる。

こゝに於てか、セントラル旅館に落ちついた凸ちやん我輩も一日、泳ぎたくなつて來らざるを得まい。

東京に居るときは、夏になると、江の島を始め、三浦三崎から遠く房州まで泳ぎに出掛けたものだ。

だから、遊泳は至つての御達者で、中學でも僕の右に出るものはない位だ。

嘘ではない。

だから、この夏になつて暑くなると、つい褌一つになつて飛び出したくなる

僕が、泳ぎの名手だとは、アメリカ人は知らぬから、一つ河童の腕前を奮つてお目にかけて、日本の少年黨の鼻を高くしやうと云ふ野心なのだ。

案内もなにもいらぬ。「海水浴行」と札を掲げた市外電車の御厄介になつて到頭、賑やかなニューヨークの海水浴場へやつて來た。

見ると海濱は遠淺になつてゐる。縞や白の海水浴着をひつかけた男女が、人魚のやうに幾萬とも知れず、嬉々として波間に戯れてゐる。

丁度チャップリンやビリウエストの活動寫眞で見た通りの景色だから盛んなこと。盛んなこと。

入場料も拂つて吾輩も汐水の中へびちや〳〵と飛び込ようと早速、着物を脱

ぐ小屋の中へ入つた。

見渡す限り際涯もなき太西洋の海！

東京の月島とはちと違ふわいと思つた。

着物を脱ぎ棄てゝ僕は越中褌一つで、波打ち際へ躍り出た。

すると傍でキャッキャッと騒ぎ廻つてゐたアメリカの紳士殿や淑女様が、突然僕の方を見て、

「あれーッ」

と悲鳴を揚げる。

「やッ！　生蛮人だッ」

「海水浴着も着ないで、裸體だ」

怪しからぬ、裸ではないぞ、越中褌をしめてゐるが解らないのか。

「何てえ、色の黑い人間だらう」

「確かに、あれはアフリカから見世物に來てゐるのよ」

「打ちのめして浴場から追ひ出さうぢやありませんか」

「えゝ。それがいゝわよ」

「何てえ、失禮な男だらう。紳士と淑女の仲へ、あの態をして割り込んで來るなんて！」

騒ぎは愈々大きくなつて來た。

成る程見た處、幾百人居るか、幾萬人居るか、とにかくこう大勢泳いでゐるアメリカ人の中には僕のやうに越中褌をしめてゐる奴は一人も居ないやうだ。

さては、越中褌はこちらでは通用せぬのかな。

其處へ浴場の監督らしい男が、つか〳〵と僕の方へやつて來た。

そして僕の頭から足の爪先まで見下ろして置いて、

「お前さんは何處から來たんだ？」

と尋ねる。

何處から來るもんか。

「僕は町から來たんだ。何故だい」

「おや。お前さんは英語が話せるね」

「當り前だよ、日本の中學の一年生は、みんなこんなもんだ。君達には秋津島根は水穂の國の御言葉は出來まい。出來るなら饒舌つて御覽」

僕は威張つたよ。

すると、監督先生は、いきなり僕の褌を怖々摘み上げやうとする。

「何をするんだい」

「これは何です」

「日本の海水浴着だ」

「これが?!……」

「左樣だ。珍らしいのかい」

このアメリカ人は越中褌を知らないのだから呆れた。すると、そんなことは如何でもいゝと云つた調子で、

「規定の海水浴着をつけない人は水泳を禁じます。すぐお歸んなさい」

と來た。

「ハ――ン。左樣か」

この時、小屋の後ろを見ると、

「海水浴客は規定の浴衣を着するに非ざれば水泳を禁ずるものなり」

とある。その傍に、成る程浴衣の見本が一枚釣してあつた。

「おや〳〵。これはこんだ失敗だ。ちつとも氣がつかなかつた」、

何と詫まつても、この意地惡監督は承知しない。

「貴君は今後入場を禁じます」

と云ひ出した。

勝手にしろやい。禁ずるなら禁ずるでいゝ、その代りお前が日本へ來て、月島の游泳場なんぞへ顔を出さうものなら早速入場を禁じてやる。

僕は癪に障つたが仕方がないから。また着物を引つかけて、のこ〳〵退場に及んだ。

「あハゝゝ、黑ん坊！」

後ろで紳士淑女達が、わい〳〵怒鳴つたり笑つたり。僕は「歸り車」でセントラルへ引返した。すると

「お早いお歸りでございますねえ」

と部屋のバックと云ふ名前のボーイが挨拶した。此奴まで、越中褌一件を知つてゐるんぢやないかしら。

翌朝早く目を醒した。

一人で洗面所を探した。

「偉いもんだ。僕はもう西洋通になつたわい」

と思ひ乍ら、奇體な格好に出來てゐる洗面器の底の穴に栓を詰めてガラン〳〵と鐵鎖を引くとジョウと水が出た。

「〆たぞ。これで洗ふんだな。而し何だか變な臭氣がするやうだ。」

そんなことには無頓着で、僕はザブ〳〵と顔を洗ひ終つて、そのまゝ部屋へ戻つて、外出の仕度をしてゐる處へ、バック先生が慌てゝ入つて來た。

「旦那樣！　貴樣は汚ない處で、お顔を洗ひましたね！」

「汚ない處とは何だい。僕と洗面器で……」

「とんだことです！　私が、今掃除に行きましたら……あなたは……雪隱の糞壺に栓をはめて水を溜めてお出になりましたね」

「あッ！　あそこは洗面所ではないのか」

「洗面所は、あの隣りです」

道理で何だか變な臭がすると思つた。して見ると僕は糞壺で顔を洗つたのか

「ペッペッ」

六　國へ歸れば洋行歸へりだよ

僕はもう船には乘り飽きた。今度はパナマ廻り沙市行だ。

「今度は此の太平洋で一つ泳いで船長殿を驚かしてやらうかな」

なぞゝも考へて見たが矢つ張り止した方がいゝらしいので止す事にした。

僕は、甲板の上に立つて、ボッカンとして四邊を眺めて居るのみ。

澤山の鳥が相變らず船の近くに飛んできて、休んだりなんかする。

ふと國を出た時あまりの珍らしさに海鳥を捕へ樣として捕へそこなつて船長殿に出身と見違ひられて、抱き止められた事を思ひ出して自分乍らあの時の無

邪氣さが氣に入つて、一人で笑い出した。

もう今度はあんな事はせん。

何故つて君、もう世界も一通り見たんだよ、是でも國に歸れば皆んな知らない連中は（君等は皆んな知つてるから駄目だ）立派な洋行歸りとして歡迎してくれるんだからね。

そう〳〵何時までも子供染みた事ばつかりやつては居られんじやないか。

今度は順從しく甲板を散歩して居るのさ。

「陸が見える陸が見える」

今まで氣取つて居つた僕もあまりの嬉しさに遂飛んでも無いほど大きな聲を出してどなつて了つた。

此の一聲を聞いた船の中の連中、まるでコロンブスの米國へ見當時もかくやと思はるゝ樣な騒ぎである。

ドヤ〳〵と甲板に現はれて來て

「ドレ〴〵何所に？」

「見えんぢやないか凸君」

「君はいたづらばつかりして居るからいかんよ」

なんて飛んでもない事を云ふ奴もある。

「君の目は、有るのも無いのも同じ事だね。目をつけて置くのは止して何んか敷地にでもし給へ」

と一本決めつけてやつた。

「ア、見える〳〵、成程陸だぐ〳〵」

「ヤア愉快々々、僕等は桑港へ着いたぜ。」

と手に手に雙眼鏡を握つて火煙の間から遙かにサンフランシスコを眺めて子供の樣に喜んで居る。

喜ぶのも當り前だ。紐育を離れてから、今日で丁度十五日になるが、其の間日夜目に入るものは水と天だけ、青々とした陸地を望むのは今が始めてだもの、其の喜びたるや、こても太平洋の樣な大海を航海したものでなければ味はふ事が出來やしない。

頓て一時間計りする内に左右に帆影が見えて來た一隻又一隻と見えて來て後には汽船も見えて來た、更に陸地は右舷の方にも見えて來た。

明日は無事上陸が出來るといふので航海の無事を船長に謝して食後は各々醉顏を海風に拂はせ乍ら散歩して居る。

半輪の月は中天に清く輝やいて居て、影は穩波に映じて銀砂子を振り撒いた樣である。

翌くる朝は皆々大元氣で常より一二時間づゝも早く起きて騷いでゐる。

中には一晩寢ないで甲板の上で飛び廻つて居たものもあつたそうだ。

僕等の船の碇泊した傍にはカナダ行の客を萬載した船が黑煙をもう〳〵と吐て今にも出航しやうとして居る。

陸の上に粗末な建物の見えるのは隔離室なそうである。

何れの船でも患者を上陸せしめる處なそうだ、やがて檢疫官がやつて來て、乘客一同を檢して去り他の船にと行つた。

陸地はズーッと松林が續いて居る、而かもそれが日本の松とは違ひ眞つ直ぐ茂つて居る遙かに見える山頂には一面に雪を戴いて居り高臺には寺院や何んかの大建物が美しく並んで居る。

僕等は何んの面倒もなく上陸した。凸ちやん矢つ張り米國を始めて見る譯ではないが珍らしい。その建物の大きいには驚かざるを得なかつた。

七　四十七階を上つたり下つたり一夜中

其の日は呑氣にも宿も定めず終日所々方々を散歩した。夕方宿を定めて泊つたが大きいの大きくないのつて、四十七階の建物で、プランホテルと云ふのだつた。

日本では東京驛前に出來た只つた七階の海上ビルデングが大きいとか何んとかつて評判して居るが、あの連中を連れて來て見せたら慥に腰でも拔かすに決つてる。

かくいふ僕もこんな大建物は始めて見たので、少なからず吃驚したが幸に氣も遠くならずに濟んだから案ずる程じやなかつたのさ。

僕は此の建物の丁度十階目の三百五十三號室に泊る事になつた。

一度リスボン市に於て宿を見失つて苦き經驗を味はつて居るから今度は忘れつこなしだ。

もういくら遲くまで遊んでも大丈夫と思つて、室掛りの男に向つて、

「今晩は一寸遅くなるかも知れん」

と話したら、その男、

「遅くお歸りになつたらこの鈴を御鳴し下さい」

「直ぐに戸を開けます。そして家の中にお這入りになつたら、此の昇降機の戸を開けて靜かに御締めになつて下さい」

「若しも靜かに御締めにならないと出られませんよ」

「そしてこの綱を曳けば宜しふ御座います」

と叮嚀に敎へてくれたので、もう是で安心、何時まで遲く遊んで來やうと大丈夫と、フイと外に出かけて見た、

今迄で露西亞の暗い樣な處を見て來たのだから其の繁盛な事は殊更に僕の目を引く、知らない處は自働車にも乘つた。日本の自働車よりは乘り心地が余程よい。

畫丈けでは時間が足りないので夜のサンフランシスコを見物して夜の十二時過ぎに歸つて來た。

朝敎へられた樣に鈴を押すと、

「ゴーッ」

と音がして何んの苦もなく大戸が開いた。

さて次は昇降機である。瓦斯の光で昇降機の入口が判つたので、先づ安心と愴惶て飛び込み、

「ピシャン」

と戸を閉めて、ハッと思ひ付いたけれ共、もう遲い。

後悔しても何んの足しにもならなかつた。

「綱を引けば動くから」

と敎へられてあつたので、力を籠めてグーンと綱を引くと、エレベーターはド

ン〳〵上に昇て行く。

自分が下りねばならぬ室の前まで來ても止らない。

一番頂上の四十七階目に行つてピッタリと止つた。

是ではならんと今度は別の綱を引くと、スーッと下りて來た。自分の室は此處だなと思ふ間もなく、スーッと下りて土間へペタリと着いて了つた。

もう一度〳〵と思つて上つたり下りたり、約十四五回もやつたが、何うしても自分の室の前に止める事が出來ない。

こんな事をしてるより梯子段を上つた方が早いと思つたので、戸を開けて出樣とすると戸が開かない。

さつき、ピシャンと亂暴に閉めた爲らしい。

「糞、いま〳〵しい」

「今夜は一つエレベーターの中で明かしてやれ」

と覺悟を決めて、其の儘、グッスリと寢込んで了つて。

翌朝掛かりの男が此の態を見て吃驚して居る。

「昨夜の教へ方が不充分でした」

といつて平謝りに謝つて居たので却つて氣の毒になつてしまつた。

サンフランシスコでは、エレベーターの中で寢たりなぞして約一ケ月ばかりも遊んでそれから布哇に廻つて無事横濱に歸つた時の嬉しさ。

然し諸君失策談は内緒にしてくれ給ひね、是は凸ちやん一生の御願だからね

凸ちやんの世界見物終

大正八年四月十日印刷
大正八年四月十五日發行

田中不二雄

▲著者權所有▼
▲定價 金四拾錢▼

東京市日本橋區若松町四番地
發行者　湯淺粂策
東京市神田區松住町五番地
印刷者　菅井十一郎
東京市日本橋區若松町四番地
發行所　春江堂

近代文學會編

評好の前空

容内の如何に豐富なるかを見よ

手紙とはがき　新編書翰文

△菊半截四五〇頁▽
△定價金五十錢▽
△郵税六錢▽

候文と言文一致　新書翰文

△菊半截四五〇頁▽
△定價金五十錢▽
△郵税六錢▽

前者内容

一祝賀、二招聘、三誘引、四勸誘、五問候、六忠告、七送致、八弔慰、九謝罪、十謝禮、十一謝絶、十二時令（期文、春秋たより）十三名家通信

後者内容

年始、春夏秋冬のたより、霜旅、怨叱、歎喜、精より細に入り、細より微を穿つ更にその言文一致の項に至りては正に現代人の讀み且つ認むべき盡して餘す所なしと云ふべし

名著文庫

新裝成る。或は濃艶に或は瀟洒に、各々好妍を競ひて江湖に見ゆ

江見水蔭	美人船	江見水蔭	戀の浮島
松井松葉	金剛武者	江見水蔭	海底の寶庫
田村松魚	若旦那	江見水蔭	荒鷲の爪あと
江見水蔭	漁師の娘	松井松葉	女の義理
松井松葉	一夜書工	江見水蔭	稲妻銀行
江見水蔭	野蠻人	天外	文錄男
奴之助	花山花人	江見水蔭	飛ぶ人
水陸	二人女王	江見水蔭	たれの罪
大澤天仙	善道邪道	松井松葉	金貸吉次

【定價四拾錢】【郵稅六錢】

【四六版極美本新裝】

□斗ケ澤助五郎著□ □最新刊□

卓上雄辯 式辭と演說

□三五判綴クロース英本□
□紙數二百六十六頁□
□定價金五十錢□
□郵稅六錢□

出でたり！出でたり!! 要求は滿されたり!!

類書中の權威、星辰界の大陽

明治より大正に渉る間所有名家の名辭名說を更に精選して集めたものが本書である。下に一部を拔き出した顏振れを見られたなら最早喋々の是非をされる人はあるまい。

國語學校開校式訓辭（乃木希典）
講習會發會式辭（星亨）
教育會總會祝辭（田中光顯）
同業組合大會告辭（小松原英太郎）
日本倶樂部席上演說（伊藤博文）
日英同盟祝賀式々辭（小村壽太郎）
創立紀念祝賀演說（大隈重信）
鐵道落成祝辭（後藤新平）

桑原柏雪編　菊半截形美裝　紙數五百五十頁　（忽七版）

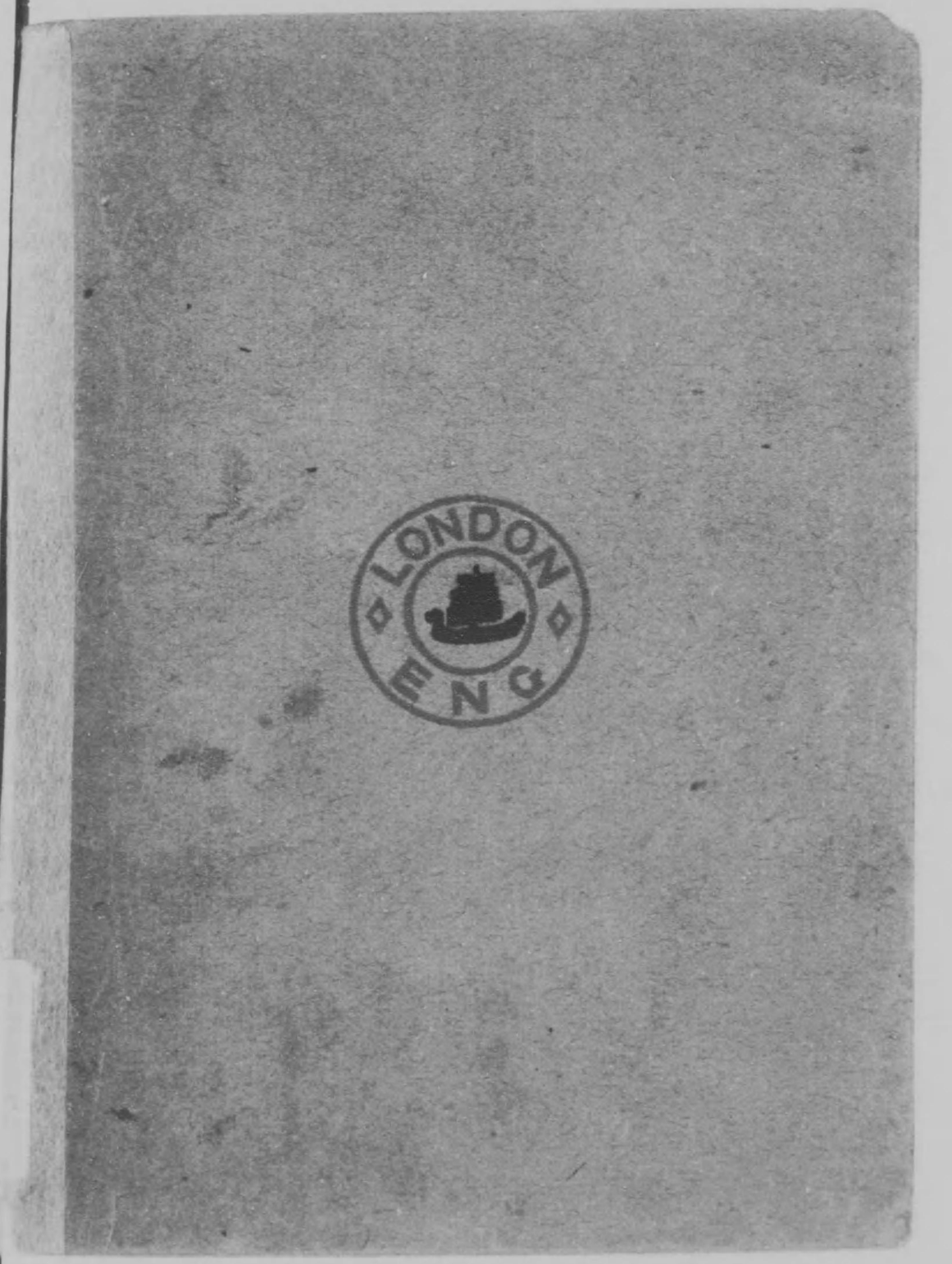
代表作美文集　自然と美

定價　金五十錢

送料　六錢

自然は人生の生命である、文壇大家の自然觀より成れる美文傑作集を見よ

山の色、水の聲、鳥の歌、花の薫、梢を渡る風の音、草の葉末におき添ふ露の玉、誰か文にあらずと云ふべき、されど是等自然の文章をして益々其美を發揮せしむるには、一種靈妙の力を有する詩的才筆を待たざればなはず、本書は最も茲に意を注ぎ古今諸大家の名文傑作を選擇蒐集したり妙文本書に泉の如し

281
109

終